

李箱「終生記」における「本編」の構造と秋の主人公

The Structure of the Body of “The Record of Lifetime” of Yi Sang and the Protagonist of Its Autumn Episode

辛大基
SHIN Daiki

要旨 李箱の「終生記」は形式的に「前書き」と「本編」に分けることができるが、内容的には「本編」をさらに秋の物語と春の物語に分けることができる。また春の物語は秋の物語の主人公によって書かれる作品という構造を持っているが、以上の構造を検証していきたい。そして二つの物語における主人公の人物像は相反しているもので、それは因果関係によってもたらされた結果であるが、それによっていくつかの時間構造の解釈ができるようになる。また二つの物語を分ける基準になるのが貞姫から来た手紙であるが、この手紙は秋と春を分ける境である一方、反りの合わない二つの物語を繋ぐ重要な役割も果たしている。やがて二つの物語は春の物語に進むにつれて境が薄れ、一体化してしまうが、その一体化の根拠を作るのも手紙の役割で、なぜ一体化せざるを得ないのかは秋の主人公の置かれた境遇によるものであるが、秋の物語を分析することでこの全てが明らかになってくる。

序

李箱の「終生記」に関する分析の方法は数多く存在するが、本論文は、物語の構造と、主な登場人物で、話者である主人公の語りを分析することによって、今まで論じられなかった「終生記」の意味を究明するのを目的とする。その最初の段階として前回の論文¹⁾では「終生記」の「前書き」を分析することによって「終生記」の構造や、その構造による話者の問題を明らかにしてきた。それを簡単に要約してみると、「終生記」の全体的な構造は形式的に「前書き」と「本編」に分けられ、「前書き」は「本編」の前に位置しながら「本編」の内容を要約した形で、「本編」の内容を理解するのに重要な役割を果たしているとともに、主人公が「終生記」を執筆するに当たってどれほど苦勞したのかという作者としての主人公の心境を表した文章として、主人公の内面を直接聞かせる役割を果たしているものであった。

しかし「終生記」はそれにとどまらず、より複雑な構造を持っているが、内容的に「本編」の構造は秋と春の二重構造に分けられるものであった。その二つの構造は、秋の主人公が置かれている秋の物語と、その秋の主人公が春の出来事を回想している春の物語に分類できることを示しておいた。しかも春の物語とは春の出来事を回想しながら、秋の主人公が書いている作品であるため、「終生記」という作品の中でもう一つの作品が入っている「額縁小説」の構造であり、このような構造とともに作品全体が循環構造を成していることも明らかにしてきた。

1) 『人文社会科学研究 第21号』千葉大学大学院人文社会科学研究科 2010年9月、14～26頁

その循環構造には面白い仕掛けがあり、作品の文章自体は終わっても作品自体は終わらない内容もさることながら、時間的な順序が作品の結末に続いて「前書き」の順になっているため、読み終わった後、「前書き」に再び戻らなければならないという循環構造を合わせて持っているのがあった。このような構造に対応して物語を進める話者もそれぞれ存在し、秋と春の話者は厳密には違う人物として存在し、また「前書き」の話者は秋の話者の延長線上にはいるが、時期的に違う位置に存在する者であるため、「終生記」全体の話者は3人存在することになっている。

本論文では、以上の「前書き」の分析を踏まえて、引き続き、「本編」における構造や話者の問題を分析していこうと思っている。まず前回で述べた「前書き」と「本編」の構造、そして「本編」さらに額縁小説として秋と春の二つの構造を持っている作品として検証していくつもりである。その上で、各構造の問題や話者に関する問題を分析していきたいが、とりあえず、本論文では秋の主人公の特徴を分析していくことにする。秋の主人公がどのような状況で春の物語という作品を書き、なぜそのような作品を書かなければならなかったのかという秋の主人公の人物的な特徴を明らかにしていきたい。そして「本編」の二元構造とそれに伴う秋と春の話者は、「本編」が進むうちに境界が薄れ、次第に統合してしまい、一つの統括された作品として完成されるのであるが、それを論じるには春の物語までを範囲に入れなければならないが、本論文ではその前の段階として、どのように統合していくのか、その経緯を見出していきたい。

1. 「本編」における秋と春の二元構造

「前書き」で示された「終生記」を書くためにどのように苦しみながら完成させていったかは、結局のところ、これから分析していく、秋の主人公が「本編」を書くためにいかに苦悩したかにかかわる問題である。したがって「本編」は秋の主人公によって語られる物語で秋の主人公が基本の軸をなしている構造である。しかしながら「本編」は秋と春という二つの構造からできていることも前回の論文で指摘したが、その二つが絡み合って複雑な作品になっている。つまり、「本編」の内の春の構造は、秋の主人公が回想しながら書いている作品であるため、作品の中の作品という構造を持つ、いわば額縁小説で、その境界やそれを語る話者の存在が薄れて絡み合って一体化してしまうため、複雑な物語になっているのである。

「本編」のストーリーを、大きく「秋」の物語と「春」の物語、二つの時間の物語に分ける分水嶺の役割を果たしているのが貞姫という存在であり、さらに貞姫からきた手紙の挿入である。ではこの手紙によってどのように物語が分けられるのかをまず次の文章を引用して考えてみよう。

13 個の遺書がほとんど完成していくのだった。しかしどれを選び出して読んでも、みんなが36歳で自殺したある「天才」が去りながら枕元においた蓋世の逸品の垂流から一步も出ることができなかった。私にこれしか才能がないのかというのがまたとなく悔しく、重苦しい事情で、また焦燥の根元だった。眉間を顰めてももっとも高邁な顔は持続すべきことを忘れてしまわず、そして続けてひどく懊悩していたら（私は一分一秒を無駄にはしない。私はない知恵を絶えることなく搾り出す）速達がきた。少

女からだ。

²⁾先生！夕べの夢でも私は先生にお会いしました。夢の中で先生はとても多情でございます。私を子供のように可愛がってくださいます。

（中略）

3月3日午後2時に東小門のバス停留所前に必ず来ること、そうでなければ大変なことになります。私からの懲罰を避けることはできません。

満19歳2ヶ月を迎える

貞姫

李箱先生へ³⁾

もちろんこれはすべて真っ赤な嘘だ。しかしその一触即発の際どい用心法が、特にその中でも結尾の比べられない清楚さが見事に疾風迅雷を含んだような名文だ。

私は卒倒しそうになりながら舌を打った。私はうっかり騙されることにする。騙されてしまう。

（中略）

しかしその手紙を受け取って欣喜雀躍、私は蓋世の経綸と遺書の苦悶をきれいに洗い流すためにすぐ床屋へ行った。私は普通じゃない豪傑らしく唇に歯磨き粉を白くつけてはその絢爛たる鏡の前に座って、もう豪華壮麗に開幕しようとする私の終生を悠々と楽しむことにしてそれに当てはまるように私の格好を收拾しようとするのだった⁴⁾。

引用の文章を分析すると、遺書の文章をどのように書くかに悩んでいる主人公に手紙が来て、その手紙の文章がそのまま挿入された後、その手紙での告白を嘘であると断定しながらも少女の要求に応じることを決心するという形を取っている。ところが、見た目からしては何の変哲もない普通に繋がっている文章であるが、手紙の文章を前後して季節は秋と春に分かれるのである。手紙の文章が挿入された後「少女」という秋の主人公の頭で描いていた人物は「貞姫」と、具体的な名前を持つようになり、具体的な人物として登場するようになる。貞姫という名前が登場する前までの主人公は秋の寂しい風の中で一人で寂しく「終生」を迎えようとしている状況であるが、「少女」とのことを回想しながら手紙が挿入された後の主人公は、寂しく終生を迎える態度とはかけ離れた、貞姫の嘘の手紙を批判したり貞姫の要求に応じて会いにいくために喜んで支度したりする人間の日常を営んでいる様子に変わっている。このことは舞台が秋から春に移ろうとしている一連の装置である。

しかしながら、秋から春への移行は急に行われるのではなく、秋の主人公の悩んでいる姿が描かれた後である。秋の主人公は何かを回想しながら作品を書いている状況を分からせる、作品に使うつもり文章が混じっていたり、引用で示すように現実の自分に戻って遺書の問題で悩んだりもしているが、手紙を基準にして時間的、空間的な舞台が完全に春

2) 手紙文の始まり。

3) 手紙文の終わり。

4) 「終生記」金允植篇『李箱文学全集2 小説』文学思想社 1998年11月、380～381頁。原文はハングルで、筆者の翻訳である。翻訳はなるべく原文を忠実に反映しようとしたものである。その際、いくつかの翻訳上の問題点も現れたが、日本語で意味が通じるように直した。以下の引用はこの翻訳に従う。ただしページ番号は全集に従う。以下「終生記」の引用はページ番号だけを示す。

の物語へと移行するのである。春の物語に移ることは少女のことを回想しながら書く、主人公の作品の中の世界へと移るのと同時的なものである。したがってここで作品の構造は物語の中の物語の構造である額縁小説の構造が成立していると言えるのである。

主人公が書く作品の中の世界に完全に視点が移るのは「速達が来た。少女からだ」という文章からで、その前までの叙述は、主人公が自分の置かれている環境や作品を書いている状況、作品になる文章の一部を挿入しているだけで、視点は秋の主人公のままでいる。自分の部屋で作品を書いている様子を語りながら、作品に挿入されるべき文章を提示したりもするが、手紙が来たと言語、手紙の文章を挿入することによって春の視点に移るのと同時に書いている作品の中に視点が移るのである。そのことによって、「前書き」と「本編」が分かれているようには明らかに分かれてはいなくても、内容的に二つの構造に分かれるのである。

ところで、このような視点の移行と構造の二元化は、額縁構造の中へと移動する以外にも変化をもたらしているものがあるが、少女の存在が具体性を帯びてくるのがそれであるのは先ほど言及した。「少女」から手紙がくるという形式的な構造の変化は、同時にそれまで主人公が作品の一部の文章として提示した「少女」という不鮮明だった人物像が「貞姫」という具体性を帯びた登場人物に変るのである。これはつまり、漠然とした作品の構想から明確な人物構成を作り出したことであり、そのような構想が実を結んで実作として作り出されたことを意味する。そのため、作中作品は貞姫という名前が始めて登場する手紙の終わりの文章から始まることになり、手紙文の出だしの「少女からだ」と、名前を明かさなかったのと手紙の終わりの「貞姫」と差出人が明確に書かれている構造は秋と春をうまく緩衝させてオーバーラップさせる機能の他、主人公の現実と虚構の世界をうまく繋ぐ役割をも果たしているのである。

2. 手紙の役割と秋の主人公

それでは以上のような手紙の役割と絡んで主人公の特徴がどのようなものでどのように変化するかについて考察してみよう。まず貞姫からの手紙が秋と春、現実と虚構を分ける分水嶺のような役割を果たしていることは分かったが、そのことによって話者の性格にも変化がもたらされることを、秋の物語の話者である秋の主人公の人物像を考察する前に指摘しておかなければならない。

貞姫という人物の明確化によって物語は秋から春へと変わることは分かったが、話者である主人公の性格を二分化させているのも手紙の大きな役割である。それは主人公自身の性格や彼を取り巻く環境にも変化を生じさせているもので、その変化とは二つあると考えられる。一つは死を覚悟していた主人公が一変して活力や希望に満ちた生き生きとした主人公への変化で、もう一つは独身男の物語から一変して女性との恋愛関係を持つ恋愛物語への変化である。

貞姫からの手紙が挿入される前までの主人公、つまり秋の時点での現実の主人公は残したい遺言を探していたり、毎日のように死ぬことばかり考えたりする、もはやこの世に一切の未練も残していない存在である。この主人公が貞姫からの手紙を受け取ったことを回想しながら、作品の世界の中に視点が移ると、一変して生の意欲が沸いている状態になるのである。少女に会うことを主人公は真っ赤な嘘であると知りつつも「しかしその手紙を

受け取って欣喜雀躍、私は蓋世の経綸と遺書の苦悶をきれいに洗い流すためにすぐ床屋へ行った。私は普通じゃない豪傑らしく唇に齒磨き粉を白くつけてはその絢爛たる鏡の前に座って、もう豪華壮麗に開幕しようとする私の終生を悠々と楽しむことにしてそれに当てはまるように私の格好を收拾しようとするのだった」と、一応は絶望や死ぬことに近いことは考えているが、そのような類の人に見出すことのできない生き生きとした感覚を持って人生を楽しもうとする態度まで見せているのである。

それを語っているのは春の主人公自身で、人生の終わりを派手に飾ることが目的であると明らかにしているが、死ぬことだけを考えていた秋の主人公にとって手紙を回想すること自体は単純に春を思い出して春へ移行するだけのことでなく、生への喜びを思い出させるきっかけにもなっているのである。

そしてこのような主人公にとってもう一つの変化は独身男の寂しい生活物語から恋する相手を登場させ、それにまつわる恋愛物語に変わることである。手紙が来る前の物語は主人公の周辺に関するものである。作品を展開させるように重要な役割を果たしそうな事件などもなく、ひたすら主人公の独白によって自分の一日を分からせる短い文章が並んでいるだけの単調な内容とともに描かれている主人公一人の生活は毎日のように死ぬことを考えたり、そのための遺言になりそうな文章を探したりする日課であることが分かる。そのような主人公の周辺雑記的な感覚で描いている男一人の物語が手紙を受け取ったことを回想してからは春の時点に入り、本格的に貞姫とのデートやそれに関する恋愛物語に変身するのである。貞姫との恋愛関係がどのように展開するかに関しては次の機会に考察していくつもりであるが、貞姫との約束の場所から、いかにしてでも彼女の心を奪うための行動をしたり、その行動が通じず絶望したりする男女における恋の綱引きの様子が展開されるのである。

以上までの手紙の役割によって分けられた構造を再び作品全体の構造と比較して考えると、前回の論文で考察した作品構成における叙述の時間的な順序がどのようなものであったのかが証明できる。全体的な作品の順序は「前書き」→「秋」→「春」で、時間的な順序は「春」→「秋」→「前書き」で、さらに主人公の叙述の時間、あるいは作品を書いた時間の順序は「秋」→「春」→「前書き」になるという、「終生記」における時間の問題点の指摘であったが、主人公の性格の違いによって秋と春を分けることができるからこそ順番付ができ、それによって分かってくる時間概念を考えられるから理解できる構造をもっているのである。本来なら連続線上に在るべき主人公は違う性格を持っていれば連続性は失われ、同じ性格を持っているとすれば過去から現在までのストーリーの展開は考えられない状態になってしまう。しかし、この性格の違う二人の主人公をうまく連続させることによって事件の進展や時間の経過を表現することができ、さらに上記のような複雑な時間概念の表現も可能になっているのである。なぜなら以前までは現在とは全く違った秋の主人公がどのようにして現在に至ったのかを考えることができ、またそのような過去や現在をどのようにしてどのような心境で記録したかを見せることに成功しているため、様々な時間の順序が生まれてくるのが可能になるのである。

逆に本来全く別の人物には連続性を与える必要性が生じるのである。秋の主人公はそもそも過去の自分の出来事と現在自分が書いている遺書などを別のものとして構想しておいて、次第に一体化させている。全く別の作品を現在書いている遺書と一体化させようとする

ると逆に連続性が必要となってくるが、このような事実は主人公が遺書を書くためには自分の書こうとしている遺書と春の回想を強引に結び付けようとした意図を隠さなければならず、二つの作品をうまく繋げるための手段として手紙を利用しているのである。したがってこのような全てを結びつける接点の役割をしているのが貞姫からの手紙である。

以上までで、秋の主人公から春の主人公に変わりながら、二人の間は正反対な性格を見せるようになっていくことが分かったが、手紙はその二人の変化を分ける役割を果たしているのである。それはつまり、「本編」の構造の中で、現実世界と作品の中の世界を分ける役割をしていることを意味しているが、その一方秋と春の世界を繋ぐ重要な役割をしていることが分かる。ではこのように分けられている秋の主人公の人物的な特徴を詳しく分析してみよう。現実の世界に置かれている秋の主人公は「私」＝「李箱」という名前で登場する。主人公は自分について次のように語っている。

私は只今秋風がうすら物淋しい私のじめじめした部屋で一人寝て終生を迎えている。
両親の忠告によると、私は間違いなく満25歳と11ヶ月の「紅顔美少年」だということだ。だけど私は確実に老翁だ。その日一日一日が「人生は短く、芸術は長い」という物凄い一生だ。

私は毎日殞命した。私は眠り ― この眠りこそいつ始まった眠りだろうか ― から覚めると痛切な生涯が開始されるのだが、青春が容赦なく蕩尽されるのを布団を頭までかぶって寝ても歴々と目睹する⁵⁾。

引用は「本編」が始まり、作品を書いている様子を語った後に続く文章である。この「私」は寂しい部屋で毎日死ぬことだけを考えている人物で、時間的な背景は、「秋風がうすら物淋しい私のじめじめした部屋」と語っていることから、秋の時点におかれていることが分かるのである。これだけの情報ではこの秋の主人公を明確に理解することができないが、秋の主人公の人物的な特徴を最も明確に表しているのが主人公の年齢である。それは時間的な背景を推測できるようにしている最も重要な手がかりでもある。上記の引用の時点で主人公が語っているのは「25歳と11ヶ月」の「紅顔美少年」、つまり若い青年としての人物的な特徴が強調されることになる。しかしながら、そのような特徴は後ほど展開される貞姫との恋の綱引きでの敗北によって老翁に変身してしまうのとは対比的な設定であり、なぜ自分がそのような変身を遂げなければならないかの壮絶な記録をより強調させるための手段である。

ところで、ここで問題になっている「25歳と11ヶ月」を生きている、秋の寂しさを感じる主人公の設定は、秋の物語だけを抜粋して考えれば何ら問題がないが、春の物語を視野に入れて考えると不思議なところが浮き彫りになる。それは春の物語が始まり、その中の主人公、つまり6ヶ月前の春を回想している過去の自分である春の主人公の年齢もまた「25歳と11ヶ月」で、回想の主体である秋の主人公と同年齢であり、さらに作品が進むにつれて「26歳と3ヶ月」の年齢を持った主人公に変わってしまうことである。

この二つの年齢が「終生記」の時間を混乱させる最も核心的な要素で、最も謎を引き寄

5) 378～379頁

せているところでもある。この謎は「終生記」の構造や主人公の設定と深く関連しており、それを解くには構造や設定をもう一度考えなければならない。詳しいことはいずれ「春の物語」を分析する際に論じたいが、秋の主人公と春の主人公の同年齢化と、同一人物にもかかわらず二つの年齢を持つことは、虚構とその虚構化における時間の推移が考えられるのである。「25 歳と 11 ヶ月」は春の時点での主人公も頻繁に使っている年齢であるため、通常考えれば秋の時点での主人公は違う年齢の方が正しい。物理的な時間の流れに沿って考えられる主人公の年齢は 6 ヶ月経過しているため、「26 歳と 5 ヶ月」になるが、秋の主人公も「25 歳と 11 ヶ月」と語っているため、矛盾が発生してしまう。さらに春の出来事が続くはずの結末になって、秋の現時点に戻ったとは考えられないが、急に「26 歳と 3 ヶ月」に変わったりもする。したがって秋の主人公は二つの年齢を持っている結果にもなっている。そのため、人物設定自体が複数の「私」になっていると言えるが、彼らによって語られる複雑な話者層を成しているとも考えられる。なぜなら提示された二つの年齢は 4 ヶ月の差しかないため、季節的に秋と春の差にはなれず、もう一つの構造を成しているからである。春の時点が「25 歳と 11 ヶ月」だとすると、秋とは「26 歳と 5 ヶ月」ぐらいになるはずである。したがって秋の「私」はより未来の時点で回想しながら作品を書いている構造も持っていると言えるのである。

このような謎は「終生記」の構造を考えると解くことができる。秋の主人公は過去を回想しながら作品を書いているとはいっても、虚構の作品を書いているのである。そのため、春の主人公が秋の主人公と同年齢の設定でもおかしくはない設定である。それは過去の時点での自分を現在の自分が感じている気持ちをそのまま作品に移入するための装置である。そして「26 歳と 3 ヶ月」と 4 ヶ月の年齢のずれを見せているのは秋の主人公の創作活動の時間の推移として考えられ、ここからも秋の主人公が現在の自分の心境をいかに春の主人公に託しているかを感じ取ることができる。作品を書いていくことはリアルタイムとして、叙述が進む時間がそのまま作品を書いていく時間になるため、創作の時間の順序は「秋」→「春」→「前書き」の順序になっているが、作品の結末の部分に至って 4 ヶ月の差を持った主人公が登場するのは、創作するのに 4 ヶ月が経った主人公が自分の気持ちをそのまま春の主人公に託してしまったためであると考えられるのである。

虚構化することによって作品の二つの構造を一体化していく試みを見せているが、秋の主人公が自分の年齢を春の虚構の主人公と同一視したのは現在の自分の気持ちを託したからである。このようなことは秋の主人公と虚構化された作品が一体化したことを意味するが、手紙で分けられた主人公は必然的に一体化して一つの統括された作品へと生まれ変わることをも意味する。秋の主人公が書いている遺書と作中作品、あるいは各構造の話者が一体化すべき必然性に関しては後述するが、現実と作品の世界が一体化していき、その過程で、現実を書いていた「序章」も一体化して統合していき、話者も一体化して作品の語りの中に現実の話者の語りが入り混じるようになるのである。

3. 秋の主人公の置かれた環境 — 作品を書いている主人公 —

では以上のような時間の中に置かれている主人公の人物像をより詳しく考察してみよう。秋の時点での主人公が何者かを知るには置かれている境遇をもう一度考え直す必要がある。まず主人公の日課から考えると、何かしらの作品乃至は文章を書いていることが分かる。

では執筆しているものとは何だろうか。それは「十二時間以内に終生を迎えて、そして仕方なくああ工夫したりこう工夫したりしながら、遺言らしいものがどこか遺失されていないかと探して、探してはそこから役に立ちそうなものをいくつか選ぶ⁶⁾」と語っていることから遺書を書こうとしていることが分かる。したがって秋の時点での主人公は「終生記」という作品の中で更なる作品を書いている人物設定になっており、その作品をまた「終生記」と命名しており、遺書のつもりで書いていることが分かる。

しかしながら、主人公は遺書を書くことに非常に悩んでおり、毎日のように死んでいく状況下に置かれている。何かに絶望して人生を終らせようとしており、遺書の悩みでさらに絶望をしている。その様子は次のように語られている。

私は毎日殞命した。私は眠り ― この眠りこそいつ始まった眠りだろうか ― から覚めると痛切な生涯が開始されるのだが、青春が容赦なく蕩尽されるのを布団を頭までかぶって寝ても歴々と目睹する。

(中略)

しかし孤独な晩年の中で一句のエピグラムも得られず、そのまま凄惨に私は物故してしまう。

一生の一日 ―

一日の一生は大体（とりあえず）こうして終わっては終わったりするのだった⁷⁾。

秋の主人公が引用のように絶望して死ぬことだけを考えている原因は、その裏に彼が回想する春の出来事が隠されている。春の出来事とは、主人公が貞姫に会って恋愛を楽しもうとした3月3日の出来事で、主人公が遺書としてこれから書いていこうとする作品の元になるエピソードである。それは主人公にとっては非常に切ない出来事でもあり、純粋な恋心が貞姫には通じることなく、失恋するという悲しい想いの記録でもある。それを主人公は回想して作品化していこうとしているが、このことから作中作品は、現時点の主人公から考えて過去のことでありながら、叙述的な時間は未来のことになると言える。

ここに構造的な複雑さが生じ、その中で「本編」の構造は、「前書き」を書いた主人公が自分の身辺に関する独白を吐露しながら、さらに過去を考えながら虚構の作品を披露している形で、それにもかかわらず秋の時点の語りの中でも「前書き」の話者による語りが登場したり、春の時点の語りの中でも秋の主人公の語りが登場したり、「前書き」の語りが登場したりする複雑性を見せているのである。

ところで主人公が悩んでいる原因の一つで、思うほどうまくいかず、いい文章を考える毎日を送っているという遺書作成が何かを考える際、その答えは主人公が何らかの作品を書いていることと関連付けて考えなければならない。「本編」の最初の文章は何かしらの作品執筆を仄めかす文章から始まっている。それは次の通りである。

「侈奢な少女は」、「解凍期の小川に立って」、「唇が落花のように蒼くなりながら」、

6) 379 頁

7) 378～379 頁

「薄氷の下では何がそんなに動いているのかな」、「首をかしげるようにうつむいているが」、「春の気配を含んだ薫風が吹いてきて」、いやいや、「あまりにも」、いやいや、「少し」「悲しげな紅髪を触ると」それまで。それどころではない。私は一言の可憐な語彙を添加する誠意を見せよう。

「ひらひら。」

これぐらいなら完備された装置に間違いはないだろう。私は私の終生期の序章を飾るかの名高い珊瑚鞭をより確実にするために、上でのような実に私としてはあまりにも過分に奢侈で物々しい世帯道具を準備したのだ⁸⁾。

何かしら書いている文章とは、少女を題材にして文章を構想しているため、作品執筆を構想していると考えられる。ところでその作品を「終生期の序章を飾る」ものだとし、さらにそれを「珊瑚鞭」であると語っているため、遺書として構想している作品が「終生記」であるとすれば、上記の文章はその「終生記」の「序章」ということになる。しかしながら、実際においてこの「序章」は作中作品の冒頭を飾ることはなく、作品が進行していく中の一部になってしまう。さらにこれ以上作品として拡大して続くこともなく、ほぼ上記の文章のまま終了してしまう。

その理由は、前回の論文で述べた通り、作品にミスを犯したとされる理由である、本来自分が描きたかった貞姫との幸せな結び方ではなく、悲惨な結果で終わってしまった作品の内容と通じることで、上記の引用の段階までの主人公はあくまでも清楚なイメージを持つ少女として作品を描いていこうとしているためである。後ほど展開される、主人公の書く作品の世界は当初の発想とは違う、少女に騙され、惨めに人生を終える自分の姿が展開されるが、その際、「前記の奢侈な少女云々はあくまでもこの馬鹿の李箱の好意からきた曲解だ⁹⁾」と作品の話者である、春の主人公の声ではない、秋の現実の自分の声が直接挿入され、当初の清楚なイメージで描こうとした発想はミスを犯したかのようなもので、訂正をしようとしているのである。したがって上記の引用で書いておいた文章は「序章」としての機能を失い、それ以上展開されることができないのである。したがって主人公が構想していた作品と実際に書き上げた作品は全く別のもので、「本編」全体を構成する複雑な構造の一部を担っており、全体的に作品解説に困難を与えている。しかし、全く別のものとして作り上げた「序章」は作品の中で、多少形を変えることによって自然に作品に溶け込んで消えていくのである。

4. 「序章」と作中作品の関係 ― 遺書と貞姫の作品との一体化

「序章」が消えていかなければならないのは、最初構想していた少女が貞姫という具体的な人物へと絞られたためである。そして貞姫から来た手紙が挿入されることで本格的な作品の中の世界が広がっていくのが原因であるが、逆にここから考えられることは、主人公は最初少女に関する作品を書こうとし、それが次第に遺書として、貞姫への想いを込めた作品へと混ざり合っていくのである。その様子を表したのが次の文章である。

8) 378 頁

9) 387～388 頁

私は秋。少女は解凍期。

いつになるとこの二人が会って楽しい飯事遊びができるだろうか。

私はその年の春にも――

はかない世間がよそよそしくて、霜雪のような威厳をそろえた身分で、情けない不遇の月日を迎えて送らなければならなかった。

美文、美文、嗚呼！美文。

美文というのは扱うにかなり危険な手段である。

私は私の感傷の蜜壺の中で青山に行く蝶々のようについ麻醉昏死しやすいのだ。恐る恐る私は私の格好を治すべきことが分かる。

私はその日の朝、何のつもりでそのようなことをしたのか歯を磨きながら作成中の遺書のせいでひどく懊悩した。

13 個の遺書がほとんど完成していくのだった。しかしどれを選び出して読んでも、みんなが36歳で自殺したある「天才」が去りながら枕元においた蓋世の逸品の垂流から一步も出ることができなかった。私にこれしか才能がないのかというのがまたとなく悔しく、重苦しい事情で、また焦燥の根元だった。眉間を顰めてももっとも高邁な顔は持続すべきことを忘れてしまわず、そして続けてひどく懊悩していたら（私は一分一秒を無駄にはしない。私はない知恵を絶えることなく搾り出す）速達がきた。少女からだ¹⁰⁾。

先ほどの「序章」の文章を書いておいた後、毎日のように終生を迎えていた主人公が「私は秋。少女は解凍期」と春の出来事と少女を結びつけ始めている。そして「美文、美文」と叫びながら、書こうとしている遺書をいかに格好良く書けばいいのかについての悩みを吐露している。このようにして考えれば、主人公は最初から少女を貞姫と結び付けようとしたのでもなく、さらに貞姫のことを遺書代わりに残すつもりでもなかったとも考えられる。

主人公はそもそも遺書を書こうとしているが、この段階までの叙述では、なぜ主人公がそれほどまで死のうとし、遺書を書くことばかり考えているのかについての理由は明確ではない。その理由について、作品全体の結果からすれば、貞姫に裏切られたためであるが、春のその場で死んだはずの主人公が秋の時点まで延々と遺書を書けずに生きていることや、貞姫に裏切られたことを一切語らず、遺書を書こうとすることだけを語っていることは不自然なことである。この不自然さは「序章」を貞姫との切ないラブストーリーに吸収させて遺書の代わりに書き上げたことによるものである。したがって、秋の時点で死のうとしていることには明確な動機を見出すことはできない。ただ遺書を残すことに非常に悩み、次第に貞姫とのラブストーリーを遺書として残そうとしている事実だけが明確になる。

遺書を書くことで毎日懊悩している秋の主人公が過去の自分になって作品の中の叙述を繰り広げないといけないが、その際、実際の自分が作中の自分へとさりげなく一体化していくことになる。そしてこのような一体化はそこまで書いていた少女に関する作品を貞姫の存在に重ねて一体化させていくのである。主人公の前に突然一通の手紙が来るが、その

10) 379～380 頁

ことによって物語は一変することは先述した通りであるが、手紙は秋と春の主人公の性格を一変させる役割をするとともに秋と春を繋ぐ役割もしていたのであった。手紙の全文とその後の主人公の反応を表した文章は次のようになる。

先生！夕べの夢でも私は先生にお会いしました。夢の中で先生はとても多情でございます。私を子供のように可愛がってくださいます。

しかし白日下で飄々となさっている先生は私をお呼びになりません。

卑屈というのが何色でできているかをご覧になりたいければ、先生は鏡を一度ご覧になってください。そこに映る先生の顔色がすなわち卑屈というものの色です。

別れた奥様と3年間同居なさる間に出て行けという言葉一度も口にしたことのないことが先生の唯一の自慢のようですね！そんなにまで先生は人情に拘っているのでしょうか。

Rともきっぱり別れました。Sとも絶縁してもはや5ヶ月にもなるといのは先生も信じてくださることでしょうね。5ヶ月の間私には何にもありません。私の貞操を認めてください。

最後まで汚れていない私を先生に差し上げます。私の白い肌の魅力がこんなに5ヶ月も遊んでいることはなんともいえないほどもったいないです。私の産毛、細い首、神秘的な温もりが先生をお待ちしております。先生！私を呼んでください。私に全然来いとおっしゃらないことは、それもまた去って行かれた場合と同じ理論から出たつまらない人生弁護のずるい手法でしょうか。

永遠に先生「お一人様」だけを愛します。早く早く私を全面的に先生だけのものにしてください。先生の「専用」になるようにしてください。

私がとても抜けていると誤算していらっしゃるようですが、誤算としてはとんでもなく大きい誤算です。

お前なりには結構心強いと信じている安全地帯というのをお前はおそらく一つ持ったようだが、それなんかは自分の言葉一つで崩れ落ちてしまうだろう、このように申し上げたいです。また――

えいっ！なんてむかつく人生なんだとも言いたいです。

3月3日午後2時に東小門のバス停留所前に必ず来ること、そうでなければ大変なことになります。私からの懲罰を避けることはできません。

満19歳2ヶ月を迎える

貞姫

李箱先生へ

もちろんこれはすべて真っ赤な嘘だ。しかしその一触即発の際どい用心法が、特にその中でも結尾の比べられない清楚さが見事に疾風迅雷を含んだような名文だ。

私は卒倒しそうになりながら舌を打った。私はうっかり騙されることにする。騙されてしまう。

（中略）

しかしその手紙を受け取って欣喜雀躍、私は蓋世の経綸と遺書の苦悶をきれいに洗い流すためにすぐ床屋へ行った。私は普通じゃない豪傑らしく唇に歯磨き粉を白くつけ

てはその絢爛たる鏡の前に座って、もう豪華壮麗に開幕しようとする私の終生を悠々と楽しむことにしてそれに当てはまるように私の格好を收拾しようとするのだった¹¹⁾。

手紙の発信者は貞姫になっているが、手紙の始まりは「速達がきた。少女からだ」と語ることから始まっており、貞姫の名前は登場しない。貞姫の名前が登場するのは手紙文の全文がそのまま作品の中に組み込まれた後の差出人の名前のところである。これで少女は貞姫として定着していくが、手紙文を挿入することによってさりげなく置き換えることができるのである。

したがって少女と遺書、秋と春を繋いでいる手紙は遺書をどう書けばいいか分からず、悩んでいる作中主人公に、その悩みを払拭させて何かしら書くことを可能にしてくれる救いの手の役割でもある。このことによって書いていた「序章」や遺書が貞姫との出来事を作品化する文章と一体化していくのであるが、秋の主人公自身も作品の中に吸い込まれるかのように一体化していくのである。その手紙の中で貞姫は主人公李箱に熱烈に自分を愛していることを告白している。そして自分だけを愛してくれることを信じて3月3日、東小門のバス停留所に来てくれることをお願いする。しかし表面上はお願いであるが、強要するかのような態度である。これに対して主人公は、手紙の内容が嘘であると知りつつも、貞姫に会うと決心しながら作中作品は展開されるのである。

作中の主人公が貞姫に会うことを決めたことは不自然なことである。それは上記の引用からも分かるように、「もちろんこれはすべて真っ赤な嘘だ」「私は卒倒しそうになりながら舌を打った」と、嘘であることを知って卒倒しそうになりつつも、「騙されることにする」と会うことを決めてしまう。そして「その手紙を受け取って欣喜雀躍、私は蓋世の経綸と遺書の苦悶をきれいに洗い流すためにすぐ床屋へ行った」と、非常に嬉しい気持ちを抱きながら身だしなみを整えるために床屋へ赴くのである。

ところで、不自然にも貞姫の要求に応じる主人公は、貞姫に会うことを自ら「もう豪華壮麗に開幕しようとする私の終生を悠々と楽しむことにしてそれに当てはまるように私の格好を收拾しようとするのだった」と、人生の終わりが迫ってくることを確信しており、さらにそれを楽しむために床屋へ行き、その後に貞姫に会うことにしていることが分かる。またこの段階でもなぜか「遺書の苦悶をきれいに洗い流すため」と、遺書を書くことに悩んでいるが、それを洗い流すことは、今まで考えていた遺書のことは忘れることを意味し、新たな角度から「終生を悠々と楽しむ」ことによる人生の最後を覚悟しているのである。人生の最後を飾ることは何かを残そうとする意図で、死ぬ前に残したものは遺品か遺書かになる。それを作品化して残そうとしているため、貞姫に会って終生を楽しむことは、ある意味で悩んでいた既存の遺書の代わりに新しい形の遺書の材料を求めていることとも考えられる。結果的には実際の遺書として貞姫との恋愛話を書き上げているため、遺書と貞姫のエピソードは一体化したと言える。

結論

以上まで「本編」の二元構造及び「本編」における主人公の性格、なかでも春の枠の外

11) 380～382 頁

に位置して春の物語を書いている秋の主人公のおかれている状況や性格について考察してみた。特に注目したいことは、主人公が作品の中でさらに作品を書いている構造が存在することで、そのため、「本編」は大きく秋の物語と春の物語分けられる点、主人公が春のことを回想することによって作品を書いている条件が整えられ、さらにその作品がそもそも書こうとしていた遺書に代わるものになることによって作品全体が成り立つようになっている点である。

しかしながら秋と春の二元構造はあくまでも表面上のものであり、実際は作品が展開されていくにつれて、秋と春の構造の境はそれほど明確に分けることができないほど曖昧な状態になっていく。本来は主に叙述を進めていく話者としての自分とその自分が書く作品の中の自分という語りにならなければならないはずのものが、次第に同化してしまい、どちらの話者によるどちらの物語なのか分からなくなってしまった結果である。そのことによって物語の叙述的な時間は流れているが、時間的な連続性は破壊され、主人公の内面的な時間によって作品のストーリーは複雑に分裂したパズルが組み合わさったものになってしまう傾向の原因となっているのである。

これは二つの構造が一体化したと言えるが、秋の主人公は春のことを回想しながら作品を書いており、遺書を書くことを考えていた主人公は貞姫から手紙を受け取ったことを回想して、その出来事を遺書の代わりに書いていくことになっているため、ばらばらになっているいくつかの構想を一つの作品化に向けて一体化、統括していく形になっている。また春の物語を通じて語ろうとするものは、自分の分身のような主人公を作り、貞姫への叶うことのできない悲痛で切ない想いを語ろうとしているが、それは自分の命を懸けてもいいほどのもので、死までも覚悟した上での感情である。遺書のような悲壮感が漂うのはこのような覚悟が前提になっているからである。そのような貞姫への想いと最初から悩んでいた遺書作りは一体化して後ほど春の物語として展開していくのである。